終末論と考古学

安藤信策

1．はじめに

現代という時代を正しく評価するには今後、十年二十年という歳月が必要であると言われる。しかし少しでも歴史を学ぼうとする者は現代がいかなる時代であるのかを理解する努力を怠ってはならない。なぜなら歴史を認識する主体は私達自身であり、私達の現代に対する理解と、過去への理解とは相互に影響し合い、関連し合うところに歴史研究の一つの大きな意味があるからである。

当埋蔵文化財センターは設立以来まもなく15周年を迎えようとしており、関係諸機関の理解と協力をいただく中で、京都府下の多数の遺跡の調査を行なってきた。これらの調査成果は府下の各地域の歴史を理解する上でかけがえのない成果であり、空白であった歴史に新しいページを加えたものであった。それは、地域の歴史に光をあてたものであり、地域と地域との関連や、全国的な視野での位置づけの中で、さらに広がりのある歴史像へと発展すべきものである。

さて当センターが20周年を祝う時には西暦2000年を迎える。この意味でまさに現代は世紀末である。この小論では現代という時代の特徴を終末論によって考える中から、考古学の役割について改めて考えてみたい。

2．現代と終末論

文明の進展が時の流れを早めているせいであろうか、時代の流れは非常に早く、あと6年で2001年、すなわち21世紀を迎えようとしている。科学技術の飛躍的な発展によって輝かしい未来像が描かれることもあるが、20世紀末葉から見た未来像は必ずしも明るいものではない。私達はしばらく前にソビエト連邦の崩壊に始まって東欧共産主義国家が連鎖反応的に崩壊し、東西ドイツが統合され、東西冷戦が終結するという世界的な大変動を目の当たりにしたのである。しかしその後の世界の歩みの行方ははなはだ不透明である。東欧、中東、アフリカなどでの民族対立は次々に地域紛争を激化させて民衆の苦しみを増大させており、和解の兆しは見えない。国家間の経済的格差が広がる南北問題、世界的な人口増

大の問題、それに伴う資源の枯渇の問題がある。そして最近とくに指摘されているのは、民族対立に基づいた化学兵器や、核兵器による無差別なテロによって、罪なき人々が大量に殺されてしまうという危険が高まったことである。

このような時に、我が国に起こったオウム真理教のサリンテロの事件は現代の不安な状況を一層明らかにした、まさに世紀末的な事件であった。

オウム真理教がサリン事件を起こした背景には、間もなく世界を破滅させるような戦争であるハルマゲドンの戦いが起こり、これに生き残るにはオウム教を信じる他はないとする教義があったとされている。ハルマゲドンの戦いとは、世界の終末と審判について記された新約聖書のヨハネの黙示録に現れるものである。オウム真理教の終末論は、自ら終末戦争を起こそうとした自作自演の偽りの終末論であることが明らかになったが、このような教えが多くの若者の心を捉えたところに現代の問題性と不安とが顕在化したと言える。オウム真理教の事件は現代日本の病巣をはっきりと浮かび上がらせたと思われる。

多くの優秀な若者がどうしてこのような安易な終末論を信じてしまったのであろうか？

一つには前述した現代の危機的な状況が影響を与えていると言えるであろう。しかしもっと大きくは入信した若者達の歴史意識の乏しさが、オウムの教えへの批判力を失わせたと考えられる。事件の中心となった人々が理科系の学問をした人々であることも関連があるであろうが、中学校・高等学校における歴史教育のあり方が問われていることは、明らかであろう。

終末論は一つの歴史観であるが、宗教的なあるいは哲学的な歴史観と言うべきものであって、歴史家によって提唱されているものではない。しかし終末を衰退と言い替えれば、文明の興隆と衰退を提唱するトインビーの歴史観はこれに対する批判もまた多いとは言え、広い意味で終末論的歴史観の範疇に入るものである。これらについては後に述べることとして、20世紀が終わろうとしている現代は客観的に見て世界の終末を予測させるような問題を内包しているのであろうか？その兆しがどこかに現れているのであろうか。私達、歴史を学ぶ者が営々として過去を探求している間に、そもそも歴史を研究することの意味を危うくさせるような、人類の滅亡あるいはそれに近いような出来事が、近い将来に待ち構えているのであろうか？これは特定の宗教の信者でなくとも、現代に生きる私達が真剣に考えても良い問題であると思われる。

現代の私達の一応、快適な生活を支えてくれているのは高度に発達した科学技術、工業技術であることは言うまでもない。自動車、高速鉄道、航空機などの交通機関の発達と、電話を初めとする通信網、ラジオ、テレビなどのメデアの発達、そして最近のコンピューターを介しての情報の伝達は私達の行動と視野の範囲を世界に広げてくれている。このよ

うな科学技術と工業技術による生産力と貿易実績によって日本はアジアにおいて、また世界においても最も豊かな国の一つとなることが出来た。デパートやスーパーマーケットに並ぶ豊富な商品を見るにつけてその事が実感されるのは事実である。

しかし今の日本がこのような物質文明の繁栄のただ中に安住し、その繁栄を継続させようと一途に働いていることの中に、さまざまな病巣と危機とが芽生えていることは、オウム事件において示唆されたところであった。

また本年１月の阪神・淡路大震災では六千人を越える貴い命が失われた、まことに悲痛な大災害であった。この大震災の影響は日本の国全体に及ぶものであり、経済第一主義で国を挙げて走りに走ってきて、いま物質文明の繁栄に酔う日本への痛烈な自然の警鐘であるように思われる。

現代文明の危機については、すでに少しく述べたことがあり、また冒頭でも触れたところである。繰り返しになるが、人口爆発の問題、それに伴う資源の枯渇、多数の貧困層の発生と食料難、飢饉の問題、急速な工業化を急ぐ発展途上国における公害問題、エネルギー消費の増大による地球の温暖化、酸性雨等々、避けて通れない問題が私達の前途に待ちかまえている。これらの問題の中には一国では対応出来ないものがあり、国際連合の役割が今後ますます大きくなってゆくにも係わらず、国際連合の調停力が低下しているために、全体的かつ根本的な対応は難しい現状である。地球の人口は現在、56億７千万人であり、西暦2050年には、百億人を越える人々が限られた資源を分け合うことになると言われている。このような人口爆発の問題こそ人類全体の最大の問題と言えよう。

これと共に重大なのは民族紛争の激化である。パレスチナ問題はパレスチナの自治へとようやく歩み始めているが、相互の憎悪が解消する日は遠いであろう。旧ユーゴの内戦は一般民衆を巻き込んで悲惨な犠牲者を増加させる一方である。

またアフリカにおいては民族対立に端を発した内戦によって、大量殺戮がたびたび起こっている。いずれも歴史的には根の極めて深いものであるので問題が長期化しているのであるが、ここにおいても国際連合の調停は成功していない。科学技術の力によって世界が一体化しながら、しかも国々はたがいに孤立的であるところに、深く文明の危機が宿されているのである。地域的な紛争の長期化や深刻化の中から、核兵器や化学兵器が使用される危険は、東西冷戦の頃よりもむしろ増大しているとも考えられるのである。

20世紀末葉の終末的な様相は決して明らかに誰の目にも見えるものではなく、津波警報のような警報を出せるようなものではない。しかし現代文明の宿す様々な問題は、地球環境の深刻な悪化や、貧困層の慢性的な飢饉や、地域紛争の激化による核兵器の使用といった人類の生存を脅かす危機への発展を予測させることもまた、明らかと言わざるをえない。

だから危機の意識を常に持ち、物見櫓を建て、将来を見張る人々が必要なのである。過去を探求すると共に将来を見張る人々こそ、真に歴史家と言えるのではないだろうか。

３．終末論について

世界の終末について説く終末論は一つの歴史観であるが、宗教的な側面を持っている。言い換えれば、終末論を説く宗教はきわめて歴史的な宗教であり、歴史に係わる宗教であると言える。終末論の中では、キリスト教の終末論と仏教の末法思想とが代表的なものと言えよう。ここでは宗教論としてではなく、歴史観の一つとして私に理解出来た範囲で紹介したい。

キリスト教の終末論はすでに紀元前８世紀に、預言者と呼ばれる人々の発言の中に現れたものである。紀元前８世紀～７世紀にはアモス、イザヤ、ミカといった預言者が現れて、イスラエル国民のさまざまな社会悪、宗教的指導者の不真実、政治的指導者の堕落を指摘し、このままではやがて大きな災いがイスラエル全国民に及ぶことを預言している。

たとえばアモス書においては「その日には、わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くし、あなたがたの祭を嘆きに変わらせ、あなたがたの歌をことごとく悲しみの歌に変わらせ、すべての人に荒布を腰にまとわせ、すべての人に髪をそり落させ、その日を、ひとり子を失った喪中のようにし、その終りを、苦い日のようにする」とある（アモス書第８章）。

アモスにおいては裁きの対象はイスラエル国民である。イザヤにおいてもイスラエル国民の神へのそむきのゆえに次のような預言がなされている。「それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、あなたがたに告げる。わたしはこれを荒らして、刈り込むことも、耕すこともせず、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない。」（イザヤ書第５章）

それと共にイザヤは、アッシリア、バビロン、ペリシテ、モアブなどの諸国民も、つまり当時の全世界が裁きの日に会うことを預言している。「見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒らし、そこから罪びとを断ち滅ぼすために来る。天の星とその星座とはその光を放たず、太陽は出ても暗く、月はその光を輝かさない。」（イザヤ書第13章）

さらにイザヤの預言の特色は、終末の時に少数の敬虔な人々が、残りの者としてのこされることを告げたことである。

このような終末論は、アッシリアによる北イスラエル王国の滅亡、新バビロニアによるバビロン補囚、ペルシャによるバビロンからの解放とエルサレムへの帰還、神殿再建、ペルシャの滅亡とヘレニズムの時代の到来といった激動する歴史の中で脈々と受け継がれ、

やがて黙示文学的な終末論へと結晶していった。

黙示文学的な終末論はヨハネ黙示録の先駆と言えるダニエル書やゼカリヤ書に見ることができる。たとえばダニエル書においては、「その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆すくわれます。また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう。」(12章)

ダニエル書は紀元前2世紀にシリア王アンテオカス4世の迫害に悩むユダヤ人に対して書かれたものであると言われている。ダニエル書では、大いなる悩みの時が来ること、その時、救済者(ここではミカエル、別の書ではメシア)が出現すること、そして審判が行なわれ、永遠の生命を受ける者と恥辱をうける者とが区別されることが告げられている。特徴的なことは、人々の善悪の行為を書き留めたある書が存在し、この書が審判の際の証拠となることである。この書は天の書、天の巻物、あるいは命の書とも呼ばれて、他の預言書、ゼカリヤ書やマラキ書にも現われている。

このような黙示文学的終末論はイエス・キリストの時代に至り、より明確な表現をとった。イエスの言葉として記された次のような預言は当時の終末思想をよく示している。

「多くの者がわたしの名を名のって現われ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。また戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終わりではない。民は民に、国は国に敵対立ち上がるであろう。またあちこちにききんが起こり、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの始めである。そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。そのとき、多くの人がつまづき、また互いに裏切り、憎み合であろう。また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。ー中略ーしかし、その時に起こる患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現われるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。また、彼は大いなるラッパの音と共に御使いたちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。」(マタイ伝第24章)

黙示文学的終末論の特徴は、終わりの時において地上の飢饉、地震、世界的な戦争、といった災害や苦難のみならず、天体の異変が起こることの預言を含むことである。その時がいつ来るかは明確にされない。しかし、イエスの時代あるいはそれ以後の使徒達の活動期間においては、終末がさし迫っていると意識されていたことが窺われる。たとえば使徒パウロはその生涯の内に終末が訪れると確信していたようであり、これがパウロの世界伝道の使命感の根底にあると思われる。

このようなキリスト教的終末論が歴史研究のうえでどのような意味をもつのかは後にももう少し考えてみたいが、キリスト教的終末論では歴史を始まりから終わりへの一つの方向をもったものと見る点が重要であり、後の発展段階説や文明の交代説に連なるものであるとは言えよう。また終末論はある社会を構成する人々の思想の問題であるから、そうした人々の行動の歴史を記述する歴史家自身の思想の問題を含めて、二重にも三重にも、歴史の内面の問題なのである。

仏教における末法思想は、仏法の興隆と衰退という観点から歴史を見た歴史観である。

釈迦入滅後、五百年が正法の時で大いに仏法は興り、次の千年が像法の時代で仏法は次第に衰え、やがて末法の世となれば仏法は顧みられない。いわば暗黒の世となるのである。天変地異と共に世の終わりが来るというダイナミックな終末論ではなく、朝が来て、やがて夜が来るような穏やかな終末論と言える。この末法の世は弥勒仏が出現するまで続くのであるが、それは実に57億７千万年後のことであるとされる。弥勒仏が現われて再び仏教が興隆し、多くの人々が救済されるに至る。

日本では、平安時代後期に当たる、後冷泉天皇の永承７(1052)年から末法のに入るという説が有力で、多くの人々の信じるところとなった。経塚は仏典を弥勒出現の世に伝えるため、営造されたものであって、末法思想を信じた人々が具体的に行動を起こした事例である。各地に残る経塚遺跡によって、末法思想の存在を確かめることが出来る。末法思想はやがて貴族階級の衰退と武士階級の勃興という時代の過渡期にあたっての、治安の乱れと社会不安を背景として広まり、末法思想のもとで仏教界の革新運動とも言える鎌倉仏教が成立したことは、歴史上、重要な意味を持つこととなった。しかし鎌倉時代を経て、南北朝の内乱期や戦国時代において、とくに末法思想が意識されなくなるのは、末法思想の持つ緩やかで壮大な時間論のためであろうか。また日本の社会の基盤が稲作農耕にあるための時間意識の問題であろうか。

農耕においては播種から収穫までの春夏秋冬の季節の変化こそが重要である。従って人々の時間意識は円環的なものが中心であり、、始めから終わりまでという終末的な時間意識は弱められていると考えられる。円環的な時間意識は東洋的な思想の特徴とも言える

のであって、仏教思想の中に輪廻転生と言う考えかたがあることも、一つの重要な例証となるであろう。

緩やかで壮大な仏教的な末法思想は、むしろ、現代の宇宙論の中で見直されるべきであるかもしれない。宇宙の始まりはビックバン宇宙論によっておよそ150億～200億年前、地球の誕生は隕石の年代測定によって約46億年前という知識を人類が得たのは、つい最近のことである。太陽が星としての寿命を終える時、地球も運命を共にすると考えられている。それはある科学者の説によれば60億年の後のことであると言う。56億７千万年という時間との近さに驚かざるをえない。

末法思想は日本の古代から中世への過渡期において大きな影響を与えた思想であった。そして現代においても、宇宙的な時間論という点で意味を持つ思想であると言える。およそ57億年というのが将来の地球に与えられた時間である。

地球に与えられている時間はこのように長いものであっても、すでに述べたように、人類自体が滅亡してしまうという可能性があることを私達は感じている。人類が滅亡してしまった地球上にはただ、かつての繁栄を示す大都市の遺跡が残されているいるのであろうか。そこにはわずかに生き残った小動物が走り回り、星々の輝く中、地球は静かに巡り続けるのであろうか。太陽が燃え尽きるまで…。

４．考古学と終末論

歴史理論あるいは歴史思想の中で、終末論と最も関わりの深いものは、すでに触れたようにトインビーの文明論であろう。トインビーはそれぞれの文明が生成し、発展し、消滅することを述べ、その過程の中で親文明から子文明へと受け継がれてゆく文明があることを説いている。そして現代、次第に爛熟期を迎えつつあるヨーロッパ文明、アメリカ文明、極東日本文明に至るまでに、21の大小の文明が興亡したことを指摘するのである。このトインビーの理論は通説として広く承認されているものではないが、一つの文明が遺跡として、廃虚となって残されていることが立証される以上、文明は滅亡するという観点から文明を研究することは賛同できることである。さらにトインビーの重要な指摘は、文明には元来優劣がないのであり、さまざまな原因で滅亡に瀕するとしても、子文明へと受け継がれて、その文明が達成したものが伝えられていくという点であろう。

この問題には考古学は関連が深い。考古学はある文化や技術がどのように伝えられ、変化したり、消滅したりすることを実証しているからである。一つの社会、あるいは文化圏の人々の継続と滅亡を遺跡をとおして立証する考古学は、ある意味で終末論的な学問と言えるのではないだろうか。トインビー自身も、ギリシャやローマ、そして中近東の多くの

遺跡を訪れて、研究をすすめている。トインビーの歴史理論の中で需要なものに挑戦と応戦という考え方がある。文明にさまざまな危機が訪れる時、それは一つの挑戦を受けると言うことであり、この挑戦に対して適切な応戦を果たした文明だけが生き残っていくというのである。文明を円環的な時間の中で考えるだけではなく、生成・発展・消滅と言うダイナミックな変化の時間の中で捉えるという点が重要である。

さて考古学は人間の生命、あるいは人間が作り出した製作物の存続期間の有限性により、一人の個人の家や墓といった個体的なもの、そして一つの村落の住居や墓をとおして、あるいは文化圏、あるいは文明の個々の滅亡に立ち会っている学問であると言えよう。

一つの住居や墓の技術史上、あるいは社会史や政治史上の情報を汲み取って、技術史、社会史、政治史、文化史へと纏めあげてゆくことが歴史学としての考古学の役割である。

しかも無名の人々の生活の記録を文献的に知ることは、情報量の乏しさからはなはだ困難であるから、遺跡こそ個々の無名の人々の唯一の記録である場合が多い。考古学の役割は個体の情報から社会や国家の情報へと、問題を拡げ、深めることではあるが、その基になる資料は極めて個別的であり、むしろ、個別的な終末の一つの姿に立ち会っているものと言えよう。

さて、キリスト教的終末論の重要な要素として、天の巻物という思想があることを想起してみたい。終末の時、この天の巻物の記載が証拠となって、一人一人への審判がなされるのである。私達が親しんでいる仏教の教えの中では、閻魔大王の手元にも、閻魔帳なる記録があって、極楽行きか、地獄行きかが決定されるのは、全く同じ思想と言える。

考古学的なものであれ、文献的なものであれ、歴史の叙述はいくらかは、この天の巻物の性格を持っているのではあるまいか。しかも無名の個人の記録を残すものは、遺跡しかない場合が多いのである。一人一人の生涯の歴史は動かすことの出来ない経験として、個人個人の心に刻まれている。しかし、客観的に、一つの時代や社会の中でどのように生きどのような役割を果たしたかは、歴史をもって記述するほかはない。その時代にあって、文献に名を残し、まして伝記に記される人はごく少数であろう。遺跡調査の考古学的記録は遺構や遺物の即物的な記録ではあるが、その社会や国家の中で生きた無名の人々の生と死は考古学的記録の行間の中に記録されているのだと言えよう。

歴史を作ってきた真の主人公である人間は、その痕跡や製作物の背後に隠れて、いわば考古学的記録の行間にしか、その存在を窺えないことが多いのである。しかしたとえ行間からであっても、この無名の人々は、時代時代の画期に当たって、人間であることの意味や文明の意味を我々に問い続ける、かけがえのない証言者となっているのである。

5．むすび—知の連帯へ—

考古学は人間の多様な行動による製作物、小さな石器から大きな都市そのものまでも学問の対象としており、その研究法は分布調査、発掘調査といった野外調査を基本としている。私達の住む空間そのものが学問の対象であって、現代社会の経済活動と関係せざるを得ない。環境考古学という分野が提唱されているのは、考古学の特色の一端を表わしている。時間的には人類の発生以来、空間的には、人間が住み、活動し、埋葬された所ならどこでも研究の対象となる。国境を越え地球規模の広がりを持った学問である。

このように、時間的、空間的に私達の生活領域と重なっており、遺跡を訪れ、遺物を見ることによって誰もが入り込めるため、広い間口で一般の人々を招く学問であると言えよう。共に遺跡や遺物を見たり、遺跡を調査することによって生まれる共感と連帯感こそ、考古学にとって貴重な学問の精神なのである。

世紀末に当たって、諸民族の対立が先鋭となり、紛争が多発することが心を傷ましめることをすでに述べた。21世紀の最大の課題の一つは、諸民族の歴史を理解し、受け入れ、互いの生き方を尊重する中で、共生の道を模索することであろう。人間行動に関わる人文的学問は皆、この爲にそれぞれの分野で貢献するものであるが、考古学もまた歴史学の一つとして、他民族の理解に寄与することを学問の隠れた理想としなければならない。そしてなによりも言葉と思想の違いを越えた生活の領域での共感と連帯感を持って、他民族との共生の道に貢献する学問であることを目指さなければならないと思われる。

一人一人の認識力には限界があるけれども、連帯し、知識を共有しようとし、知的な交流をはかろうとすれば、その知的な広がりは大きなものとなる。

人間こそ宇宙を認識し、生命の進化の歴史と、進化の頂点に立った人間社会自らの歴史を認識する存在である。宇宙と星々と地球の生命の歴史は私達の存在と無縁ではなく、深く結びついたものである。これらの壮大な出来事の全体像に少しでも近づこうとしているのが、古代より現在に至る諸学問の歴史であり、人類が存続する限り続けられるであろう、探求の姿である。そして一人一人の知が孤立していれば、学問の進展も、科学技術の発展も、文明の高度化も起こらなかったであろう。知の伝達、受容、交流という広い意味での教育により、いわば社会的な知によって、人類は文明を発展させたのである。人類は地上において生態系の一部となりながら、地域地域における知的な環境を形成している存在である。今の日本の教育が受験戦争といわれるものであるのは、以上の観点から、連帯を目指さない知的環境を造っているという点で、はなはだ憂うべきことである。

世紀末のさまざまな危機を回避する人類の叡知は、やはり人類の知的な蓄積の中から生み出すほかはない。とりわけて人類の客観的な歴史を共有することこそ、最も有効な道で

あろうと考えられる。この場合、人々の犯した犯罪的な行為に対しても、とりわけ同胞の犯した罪に対しても、目を閉ざさない勇気が必要とされるのであるが。このことに関して、前ドイツ大統領ワイツゼッカー氏が「荒野の40年」と題する名高い演説で、第２次世界大戦の経験に照らして、誠実に過去を顧み、心に刻むことがなければ、未来の和解も生まれないことを述べているのは重要である。

ドイツの詩人リルケの詩を紹介して、この拙い小論を閉じることとしたい。

「だから、たぶんわれわれが地上に存在するのは、言うためなのだ。家、橋、泉、門、壺、果樹、窓ーと、もしくはせいぜい円柱、塔と。しかし理解せよ、そう言うのは物たち自身もけっして自分達がそうであるとはつきつめて思っていなかった、そのように言うためなのだ。」（第九の悲歌―手塚富雄訳―）

遺跡調査は千載一遇であって、たとえば千年前の遺跡が私達の前に立ち現われて、多くの場合、調査後はまた消え去ってゆく。私達が残す、住居の記録や墓地の記録だけが、基礎的なデータとして未来へと残される。リルケの言葉によれば、あるいは橋あるいは塔という記録だけが未来に残される。一つの村の存在の証しとして。そこに生活した人々の存在の証しとして。

あるいはまた、遺跡に立ち会った私達自身の存在の証しとして。あるいは私達の一つの感謝として…。

（あんどう・しんさく＝当センター事務局次長兼調査第２課長）